

時の動き

2020 東京五輪は返上したらいいと思うたぐさんの理由の中の二つ

反五輪の会 なかち きか

2013年9月7日、2020年の五輪が東京で開催されることが決定となり、「報告会」なるものが都庁前広場で開催された日、反五輪の会のメンバーは、都庁前で「五輪反対」を訴えた。そこで浴びせられた罵声は「非国民」。何も考えるな、みんなが万歳と叫ぶ時は一緒に叫べという強烈な同調圧力を、開催決定と同時に体感させられた。

五輪でみんなハッピーになるのだから、多少の犠牲は我慢しろと賛成派は言う。でも大概そのしわよせは、立場の弱い人たちのところへ行き、その犠牲は多くの人の目から覆い隠されてしまう。私は反五輪の会に参加して、そんな「いなかった」ことにされかねない人たちのことを、少しずつ知

ってきた。その中の一つについて書きたい。

国立競技場と都営霞ヶ丘アパート

国立競技場建て替えるに関わる問題が浮上してきている。環境への影響、1700億円という莫大な費用、不透明なコンペ等が次々と話題になっている。国立競技場建設は、森喜朗元首相が音頭をとって招致した2019年のラグビーW杯が発端となっているが、五輪開催決定がそれを後押しした。反五輪の会は、この計画最大の課題点を、都営霞ヶ丘アパートの立ち退きと考えている。

霞ヶ丘アパートは、明治公園に隣接し、

1964年の東京五輪の際に建てられた都営住宅で、最盛期には300世帯、現在も140世帯が暮らしている。住民の6割が65歳以上の高齢者。アパートが建つ前からこの場所に住んでいた人も少なくない。数十年にわたって営まれてきたコミュニティなのだ。「霞ヶ丘アパートを考える会」が発表した住民アンケートでは、霞ヶ丘町に80年住んでいるという回答もある

(<http://kasumi.goike2020.blogspot.jp>)。

そこに突然、一方的な立ち退きが通告された。2012年7月13日、JSC(日本スポーツ振興センター)主催の有識者会議で、アパート敷地を競技場の「関連敷地」に組み込むことが秘密裏に決定されていた。「移転していたかなければならな



2014年7月5日 国立さんを囲む会にて

いことになりました」というチラシがいきなり各戸のポストに投げ込まれたのは、そのわずか数日後のこと。そして7月20日に公表された新国立競技場デザインコンペの応募要項では、アパート敷地はまるで更地のように扱われていた。8万人収容の巨大な競技場を建てるために明治公園がつぶされ、その分の公園スペースをアパート敷地で代替するという計画が、今そこに住んでいる人たちに何の相談もなく決定されたということだ。

その後都とJSCによる説明会も開かれ

たが、立ち退きが前提の話が繰り返されるのみで、アパート取り壊しに反対する声は一切聞き入れられず、住民は複数の移転先に分散して転居することを強いられている。

野宿者への排除

もう一つ書きたいのは、野宿生活者の排除だ。明治公園周辺には野宿生活者が多数いる。それぞれに事情を抱え、隙間のような場所にひっそりと身を置いている人たちだ。話を聞いた中には、霞ヶ丘アパート住民と同じく何十年もこの地に根を張ってきた人もいた。

東京都やJSCは、競技場建て替えの機に乗じ、野宿生活者に立ち退きを迫っている。今年7月には、下水管工事を理由に、工事範囲内に住んでいる人たちに対し、計画の紙切れ1枚を示して立ち退きを迫った。卑怯なやり方に支援者が抗議すると、JSCが「説明会」と称する集まりを開催するものの、霞ヶ丘アパートの住民説明会と同

様、一方的に工事予定を話すのみ。形だけ「説明会」を開催したという既成事実を作って逃げようとしているのが露骨だ。野宿生活者と支援者は、そのような「説明会」は受け入れられないと、交渉を重ねている。

オリンピックは返上だよ

都は、霞ヶ丘アパートの住民に「アパートの敷地は（公園になり）競技場を訪れた人の「癒しの場」になる」と説明したという。「追い出される私たちの癒しはどうなるんでしょう」とアパートの住民に問われ、胸が詰まる。人の生活を破壊して「癒しの場」と言うグロテスクさを、しかしすつぽりと覆い隠してしまうのが「五輪」という錦の御旗だ。私たちの目も耳も口も塞こうとする五輪は、今すぐ返上したらいいと思う。

その他の返上すべき理由はこちらで。反五輪の会 <http://hangorin.tumblr.com>

(なかしきか)